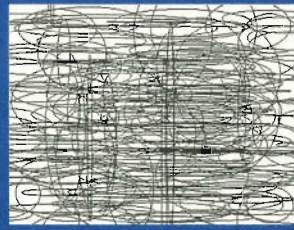


関野 昂 著作選 3

形式主義文学大全
ラーレン・ガダマー

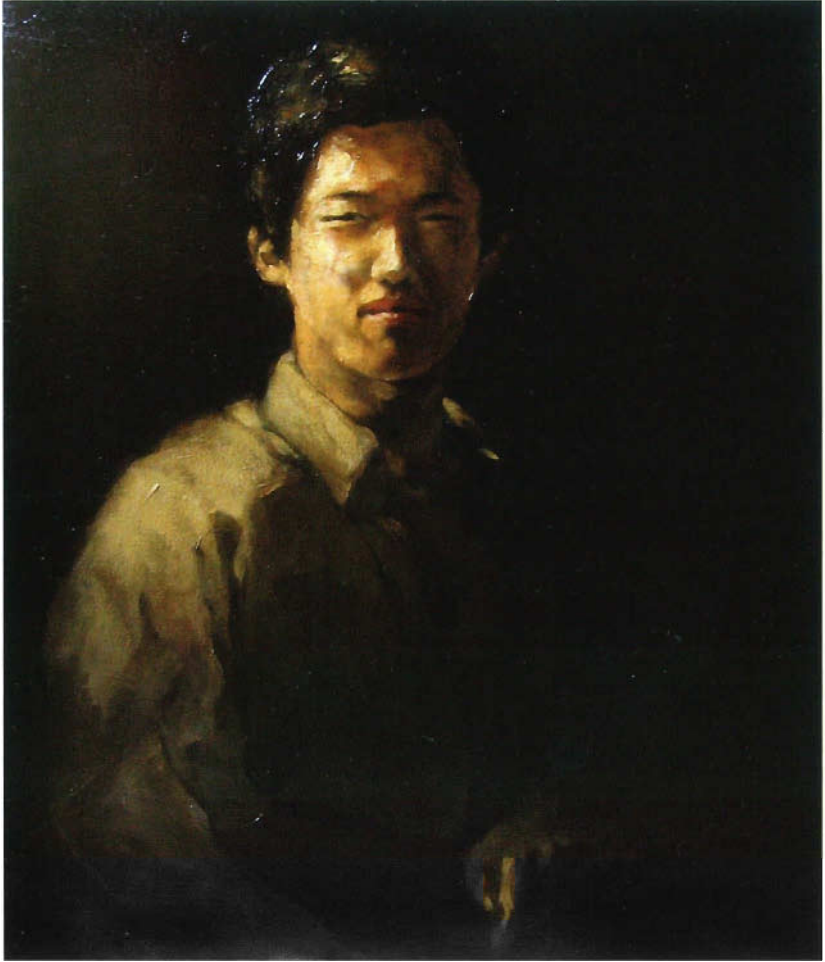


現代図書

関野 昂 著作選 3

形式主義文学大全
ラーレン・ガダマー

現代図書



著者ポートレート
「記憶」 2007年9月
小磯竜也 画

凡例

- 一、この著作選は関野昂(せいのたけ)二〇〇三年八月二十四日死去、享年十四歳)によって執筆され、本人のMOに残された作品から、二〇〇〇年以降のものを選んで構成した。
- 二、本著作選は全三巻で構成される。
- 三、著者関野昂については、第一巻の編集者による解題・年譜を参照されたい。
- 四、底本としたのは全て著者が残したMO中のものである。同名で細部の異なる作品がある場合は、編集者の責任において、正文を確定した。
- 五、正文の確定に当たっては、明らかな誤記・脱漏のみ訂正し、その他は原文のままとした。
- 六、作品中、表現に懸念を欠くと思われる部分があるが、著者が故人となっていて、ことに鑑みて、原文のまま収録した。
- 七、本著作選の編集には著者の父である関野豊が当たった。

目次

著者ポートレート「記憶」	小磯竜也画	1
凡例		3
著作選第3巻に関する編集ノート		9
序にかえて 梶井基次郎「檸檬」について		11
関野昂形式主義文学大全		
第一部		17
第二部		43
第三部 青年と哲学（本著作選第1巻所収のため、本巻には掲載せず）		77
第四部		97
別篇		79
小説 ラーレン・ガダマー		
第一章		109
第二章		133
第三章		171
第四章		175

付録

1. 戯曲「ガダマー・ラーレン」付 戦争論	ii
2. 『ラーレン・ガダマー』引用のための章句ストック	xiv
3. 『ラーレン・ガダマー』情景・プロット	xviii
4. 『ラーレン・ガダマー』参考文献	xxiv
5. 断片三點	xxv
6. 世界の宗教	xxx
7. イスラエルの歴史	xlvii

「捧ぐる言葉」「高き塔に風は吹きつけぬ」を読んで	清水 博	249
口絵肖像画解説にかえて	小磯 竜也	251
編集者による解題	関野 豊	253
後記		305

第三巻収録作品の著者の遺したMO中のファイル最終更新日時とその他データ一覧

序にかえて 梶井基次郎「檸檬」について 二〇〇三 七・十七

形式主義文学大全 二〇〇三 三・二十五

第一部

第二部

第三部 青年と哲学（本著作選第1巻所収済み）

第四部

収録作品執筆時期一覧 二〇〇三 二・十一

小説 ラーレン・ガダメー

登場人物

第一章 二〇〇三 六・三

第二章 二〇〇三 六・十六

第三章 二〇〇三 四・三十

第四章 二〇〇三 四・五

第五章 二〇〇三 四・四

梗概（各章に分散配置した梗概の元原稿） 二〇〇三 六・十六

聖サヴァン伝説(第四章末尾に配置したものの元原稿)	二〇〇三	五・十三
教団の推移(第四章末尾に配置したものの元原稿)	二〇〇三	五・二十五

付録

1. 戯曲「ガダマー・ラーレン」	二〇〇三	四・三
戦争論	二〇〇三	二・十四
2. 『ラーレン・ガダマー』引用のための章句ストック	二〇〇三	四・五
3. 『ラーレン・ガダマー』情景・フロット	二〇〇三	四・四
4. 『ラーレン・ガダマー』参考文献	二〇〇三	五・二十五
5. 断片三点		
断片1 習作 —ラーレナー	二〇〇二	七・二十四
断片2 屍と神々	二〇〇二	十・二十八
断片3 終作 —ラーレン	二〇〇二	七・三十一
6. 世界の宗教	二〇〇三	六・二十八
7. イスラエルの歴史	二〇〇三	七・十五

著作選第3巻に関する編集ノート

本巻所収の主要な二作、即ち『形式主義文学大全』（以下、『大全』と略記）と『小説 ラーレン・ガダメー』（以下、『ラーレン』と略記）は、散文詩と小説と、相貌を大きく異にするものの、執筆の背景・時期などを考慮すると、双生児の如き側面を有している。著者が中学校一年生の秋のいわゆる二学期に『大全』所収の詩の多くが書かれたが、この散文詩を書いている間に、『ラーレン』の構想は胚胎し、熟していった。その結果、中学校一年のいわゆる三学期、冬の最中から早春に至る時期に、『ラーレン』の執筆が始まり、進行了た。この様子を下に図示して示す。時期は二〇〇三年の一月から六月にかけてであり、「L」は『ラーレン』を指し、五月以降の「L関連」とは、『ラーレン』という小説本文でなく、関連資料収集と原稿執筆のためのデータ作成の作業を指す（枠のみで特に記して無いところも五月以降のものも全て「L関連」を意味する）。

本著作選解題等で既に説明してある著者のビジネスダイアリーの記述と、著者自身のMOに遺した記録によると、中一の秋段階で、すでにラーレンを登場人物とした散文詩は書かれていたが、この内容はむしろ単独の詩として読むより、『ラーレン』中の挿話として読んだ方が明確な理解が得られるようなものであった。特に、著者自身により、自己の「文学史」におけるポスト形式主義文学の魁と位置付けられた「精神と日々」は、『ラーレン』を書き継ぐ間に書かれ、後に『大全』の末尾に収録された、という経緯を持つ。『ラーレン』中で読むことで、「精神と日々」も生き、また、執筆の順に読むという追体験的な読書も可能になる、と編集者は判断した。

以上のようなことから、本著作選第3巻では、読者にとって精読し理解する上で円滑なることを優先し、かつ、著者の執筆の日々を追跡する意味も兼ねて、本来、『大全』にあった詩の幾つかを『ラーレン』

1月	2月	3月
L	精神と日々 大全	L
4月	5月	6月
L	L関連 □ □	L関連

中に挿入して編集することとした。しかし、著者自身からすれば、本来の『大全』の相貌をそのまま見て欲しいという思いが当然ありうるであろう。そこで、編集に当たっては、『形式主義文学大全』から抜き取って『小説 ラーレン・ガダマー』に象徴した作品は、冒頭の註記とともに、総て上部に太線を付して明白に区別できてわかるようにした。註記と照合していくと、著者の作成した『大全』を讀者は自分で辿って読むことができるわけである（なお、本巻で上部に線を付した部分としては、前記以外に、『ラーレン』の著者作成の梗概・資料部分の挿入に際してのものがある。編集者による処理と元原稿の状態を区別するための措置であり、具体的には本文該当箇所を参照されたい）。

このような処理はあるいは著者自身は不服かもしれない。しかし、読み手にとつて、著者の亡くなる前の一年半あまりの日々の思索を少しでも理解しやすく提供したいということが編集者の思いである以上、許してもらいたいと考える。

序にかえて 梶井基次郎「檸檬」について

“ 小説 ” と呼ばれる属性を有する小説として、私は過去に芥川や太宰のそれを読んだ。けれども長い時を経て作品の前に立った私という読者にとって、それらは読み終えてなお解し得ない部分が残るように思われた。「檸檬」に出会ったのは国語便覧の教行の梗概に於いてだった。私はその時既に「えたいの知れない不吉な塊」と自分の感じていたそれとの類似を予感せずにはいらなかった。

現在私の精神を占めている一つの感覚が彼の体験したそれと同じものであるというのではない。けれども確かに「焦燥と云はるか、嫌悪と云はるか」、別の言葉を使えば言い知れぬ煩雑、そして又途方も無い倦怠といったものが私を押し続けている。それは取り留めの無い会話によっても、模倣とした将来の空想によっても、そして又ある清浄な想念への到達によっても決して癒されない。彼が本の城壁の上に一個の檸檬を据えたその行為は私には実に自然に思われる。けれどもそうした感覚を持つ人はこの時代には恐らく少なかったらうと思う。これは断じて侮蔑の念を持つていうのではない、けれども、例えば都市労働者や貧しい農村の人々は一個の檸檬に果たして盡的なものを見出す機会が一度でもあり得たらうか？ 生活というものを越えた曖昧な聖域の中で、一個の果実に自己の全精神の救済者としての期待や幸福が宿るのを見たというような瞬間があったらうか？ 生きる事そのものに関する生活上の不安はあったとしても「えたいの知れない不吉なかたまり」を持っていたらうか？ 大正十二

年から十四年というこの作品が書かれた時期に、こういう神聖な幻想を見る人間が少なくとも現代よりは少なかったと言い得るだろう。その時代一部の人々の置かれていた境遇が現代社会のそれと類似していたと仮定して。けれども「えたいの知れない不吉な塊」を秘めた精神というのは現代社会に於いては寧ろつきものではないだろうか？

生活上の困難は少なくとも個人に対し、その外側へ向かい一つの思惟形式を閉ざす力を持っている。外部へと引き付け得る磁石を持っている。けれども生活の形式的な充足は個人に寧ろ煩雑と倦怠とを与え、それは自らの内奥へ向かう危険な引力となる。そこに「えたいの知れない不吉な塊」がある。曖昧な聖域を彷徨うというのは、私は一つの幸福を求めることだと思っている。それは生物学的安全では勿論ない、しかし生活上の安定でもない、他ならぬ精神の幸福である。生物学的、生活的、精神的、三つの充足は少なくともこの場面に於いては厳密に區別されねばならない。生物学的に危険のない場所に生き、生活上の困難もない、そして社会的にも十分に認められている。これで生物学的と生活的は充足しているといつてよいだろう。けれどもこの二つを以て精神的幸福を補う事は絶対的に不可能である。ただ、私はこの精神的というものを持ち得ない場合もあると思う。加えて生活上という事については動物の全てがそれを所有しない。にも拘わらず現代社会の人間が最も満たされないのはこの類稀なる精神的に於いてである。

「檸檬」にはこういう一節がある。——「酒を飲んだあとに宿酔があるやうに、酒を毎日飲んでみると宿酔に相当した時期がやつて来る。それが来たのだ。」。現代社会に於いて多くの場合生きる事それ自体に理由は見出されない。そして又生きる理由などという問いはある人々に関してでは成立しない。それは繰り返すやうに生活の充

足していない人々である。けれども私は勇気をもって言いたい、精神上の不幸は時として生活上の困難に匹敵すると。生きる理由は無い事が当然である。何故なら我々はそうと欲して誕生したのではないし、何よりも認識に先立って自身は存在していたのだから。だから我々は精神を所有するまでは生きる理由に関する問いを持たない。そしてその精神を所有した瞬間、全ては虚無と思われる。それが見出し得ない事への煩雑、世界そのものに関する倦怠である。けれども例えば真に社会に貢献出来るような生産的仕事にかける情熱や全てを省みぬ恋慕といったものを模糊とした外界に見出した人々にとつては、それらの不幸は十分に補われ得るものである。私もそうしてここに居る。しかしそれらを得る事が出来ずに、というよりは、それらにさえ最早耐え得ぬ倦怠を見出した時、我々はまるで子供のように純粹な憧憬というものに救済を求めるとは無いだろうか？それが「檸檬」ではないだろうか？

本の壁の上に据えられて煌々と輝く、絞り出された絵の具の如きレモンイエロウ——それは或いは彼の余りにも純粹な憧憬というものであったのかもしれないと私は思う。私はその精神に共鳴したい。そしてこの本を私の掛け替えの無い友の一人としたいと思う。

関野 昂
形式主義文学大全

そも長からぬ勤なり。墓は待つ、餓鬼の如し。

ああ、きみが膝のあたりに わが額を埋めつくして、
灼熱の眞白き夏を惜しみつつ、黄に和ぎわたる

晩秋の 光を われに味はしめよ。

ポオドレール 「悪の華」

第一部

〔編集者註〕著者自身による「形式主義文学」の時期区分における「初期」に当たる。

「独自の世界は形作られた」と自ら評価づける。

自伝

原始の海を先を争うようにして泳ぐ、無数の悍ましき稚魚の姿を——温かな水に満たされた場所に漂う、その奇異な生物は想起していた。それは、俺だ——突如とした、しかしそうに違いないと思える確信を、蛭に似たその身体のどこかに、その生物は持っていた。しかしその確信は、その奇異な生物の蛭に似た胴体にも、爬虫類を連想させる黒い眼球にも、又、その不気味な頭部にも存在していなかった。意志——自身にまつわる全てを自覚する究極の主体は、何物にも規定されない、この奇異な生物にはまだ凡そ不完全な形でしかない皮膚も、そして脳を覆う白い骨も——この生物の意志を、決して遮らない。そんな確信を、蛭に似た奇異な生物は、その白い骨に覆われた無力な脳の内、持っていた。

この生物は、現在の段階に至る少し前までは、蛭というよりも、さらに別の生物に類似していた。蛙の子——かの悍ましき稚魚。アントニー・フアン・レーウエンフックというあのオランダ人の見た稚魚を、この奇異な生物は、後に写真によって目にした。悍ましき種の、原始の稚魚を——蛙の子に似た、後の蛭、後の猿、後の豚、後の腐りきった肉片——異臭を漂わせるあの他ならぬ「物質」を、灰に覆われた悍ましき断片を——。

彼はその部屋の中で——後に一人の哲人が思索に耽り、そこに沸き起こる靈感を感じとったあの場所のように、温かな水に満たされた場所に於いて——天地創造の最初の一日を見た。天地が創造された——地は混沌としていた——暗黒が原始の海の表面にあつた——神の靈風が大水の表面に吹きまくっていた——そして主の声に、彼は眼を開いた。

一人寝台に横たわつた彼は、彼の歳を数え、彼の日課と彼の娯楽と彼の愛好と彼の彼自身を対象として認識された彼の姿と彼の周囲にある人々を——それらの概念、そしてそれらの名を、彼の脳裏に順に挙げた。それらはこの時の彼には、多少多過ぎはしたものの、まだ数え上げる事が出来た。彼は横たえていた身体を起し、寝台を降りた。彼は光に向かった。

彼はその日より、神のみの知る地平より、追放を受けた。彼はその地に留まる事が出来ても、その地は彼には別の、遠い異国の土地に見えた。彼は元よりその地にながら、何時かはその地に行く事が出来ると感じていた。しかし彼はその土地にいる時にのみ、彼の思惟と彼の運動が彼のものである事を感じる事が出来た。彼が彼の運命を知つたのは、その後の事であつた。その時、彼は他の誰よりも人を、そして彼を知つていた。知つたその日より、彼は誰よりも優れた地上の神となつた。

Mein Kampf

天地は混沌とし、俺達の親父もまだ忙しく働いていただろうあの頃、ああ、俺の精神はこの何とも薄汚い土地に生を受けたに違いないのだ。全く、あのメフィストとやらの叔母も大したものだ……あんな長いものがどどん伸びていき、そう、あの柔らかな、ぐにやぐにやと気持ちの悪く増えていく様子を思うだけで、俺はもう随分と胸が悪い。何とした事か、ああ、この世の者のとんだ痴呆と物忘れというのは、俺にはどうにも理解出来ない。いや、そうでなく、分かるからこそ俺は喚く……ああ、死ぬ、死ぬ、殺せ！俺は先ずお前らの脂ぎった汚い鼻面に喰い付き、助けを乞うお前らの血に塗れた顔を、また殴る、殴る、殴る、殺せ、殺せ、死ぬ、死ぬ、死ぬ！全ては俺の内に蟻る煩雑の、その為だ、街角に豚のように倒れたお前はもう誰からも見えなくなった、勿論俺の服についた汚れたお前の血液もだ、これは元来夢なのだ、叶わないとも、又、限るまい……ああ、何とした事か……死ぬ、天への飛翔だ、飛び立て、これ以上莫迦な事を言うな、さあ、焼け、踏め、殺せ、片端からだ……俺は神同然だ、最早、今となっては。

急げ、お前の踝に、脚に、無分別にも次々食い付く鼠どもから逃れる手段だ……だからとは言え、それ程に急ぐ事もあるまい……犬は吠える、お前は走る、自前の鉄砲をぶつ放す……やれ、暴力だ、暴行だ、実に以つて有るまじき行為だ、最早俺は何にも捉われまい、願わくは。回れ、回れ、回れ、回れ、回れ、回れ、回れ、回れ、……やれ、こんな事が一体いつまで続く事やら。とうとう俺はお前の子ら、俺を養い、俺に与えるものども、もの痴呆を、阿呆を、どうしようもない脳障害を、健忘症を、語らねばなるまい。……お前のためにだ、さあ、

死ね、一刻も早くだ！ さあ、俺の指輪はもう外れそうもないのだ、それならそうと、思い切りよく指を切つてしまえ……そこから不意に生え出した骨が、お前の眼を貫くのだ、喉をだ、腹だ、鳩尾だ、それ、もうどうしようもあるまい……逃げられまい。

さあ、お前らにはどうして分からない、俺の不幸が、お前達の阿呆が、いつまで経つても理解しない莫迦どもめ、どうして死ぬという事を今の今まで思いつかない……やれ、非道徳だ、非良心だ、非人間だ、反キリストだ……お前らの莫迦にはどうにも付き合いきれないものがある。それはそうと、俺の飯はどうした、いつもの時間だ、無いとは言わせない……何ならお前のその口を引きちぎつてやつてもいい、これはさながら人間の尊厳だ、尊敬だ、ピコ・デラ・ミランドラ、氣違い踊りだ……こんな無意味な配列に氣を配るところを見ると、やはりお前は白痴の、とんだ莫迦娘に違いないのだ、リュッケン、エーオルス、ふん、フイムブルチュール……そんな先輩がお前らのどうしようもない莫迦の根源だ、排斥すべき概念だ。そもそも、畢竟……世界とはざっとこんなものだ、俺の素晴らしき解釈によつては。俺が口直しに辻斬りにも出かけてひよっこり出会ったのが他ならぬお前だったという事は、きつと希望の、ピフロストの橋は落ちるのだ。そんな思いにしても、最後は俺自身というその事に集約されて、非暴力だろうが反権力だろうがポストモダンズムだろうが——全く俺の知った事でない。

Mein Kampf 2—我が病—

机だ、書物だ、電球だ、扉だ、時計だ、椅子だ、筆立てだ、鞆だ、窓だ、カーテンだ、布団だ、筆筒だ、書棚だ、しまいには床だ、壁だ、天井だ……一体どういった料簡だ、皆一斉に俺を呼ぶ……ははん、声無き声という奴か、糞野郎……俺の名すら知らないお前らが俺を呼ぶというのは一体どういったわけだ。大体大した用もないのに呼んでいるのだという事は、もうはつきりと分かっているのだ……だのにこの俺がお前らの呼ぶのにこのこと出かけていかねばならないというのは、一体どういう料簡だ……俺のせねばならぬ事と言え、単にお前らの中央を、裏を、触れ、押す事だ。全く、馬鹿げている……しかし、仕方のない事だ……ああ、さては俺を殺す気か！ そう俺が叫ぼうものなら、お前らはまた一斉に哄笑し、やがては静かになる。そしてまた俺を呼ぶ、声無き声……全く、馬鹿げている……しかし、仕方の無い事だ……こんな事がいつまで続くのか、これが狂人の日課だという、あの旦那のお告げか……ああ、俺の煩雑だ、懊悩だ、鬱陶だ、そしてお前らの呼び声の、掛声の、そして俺を苦しめる事にかかる元氣横溢……その驕泰ぶりだ……俺をそのように誑惑し、倨侮し、そしてまた、響き渡る、嘸嘖とした掛声……ああ、最早これまでか！

大体、お前らの言いたい事は分かっている……俺に心配をしろ、と言うのだ。その証拠にお前らは俺を実に不安にさせる……そしてまた、俺を大した綺麗好きにも痴症にも、また、大した神経質にもさせる……全く、発狂をしないという事が先ず第一に不思議というものだ……これもそれも全く、お前らのお陰だ、強迫神経症だ、不安神経症だ、こんな意味の分からない臨床用語にお近付きになれたのは、全く以てお前らの責任だ。

あり得もしない事を妄想しては悲鳴を上げる事も、また、お前らのお陰だ……じつと座っている事さえまもらぬ……ああ、早く旦那ともお近付きになりたいものだ、この病の所為で、俺は古来の俺の出身地に赴こうとさえ思うのだ。

樵の兄弟

——その昔、この世で最初の兄弟は樵であった。毎日のようにただ一心に森の木を切り、彼らの斧は、彼らが最初の兄弟であるにも拘わらず、実際彼らの両親から受け継いだものであり、森より、そして川より、又空より、又彼らの暮らす住居、そこに用意された数々の生活用品より受け継いだものであった。彼らの身に付けた衣服も、又彼らの風貌も、皆その点で彼らの斧と変わりはなかった。

樵である彼らが木を切りつつ、同時に行つた事は以下の2つである。

まず第1に、彼らは哀れな2羽の鳥の皮肉な最期について——その最期についての知識を、彼らは斧や服や風貌を手に入れたそれと全く同様の方法で得た——日々議論を交わした。哀れな2羽の鳥の最期とは即ち、以下のようなものである。彼らのように兄弟ではない事にも拘わらず、姿形と実によく似た、しかも仲の良い2羽の鳥があつた。しかし2羽が成長するにつれ、片方は肉を食らう鳥であり、又片方は虫を食らう鳥であつたという事が明らかになり、そのため2羽は、次第にお互いを避けるようになった。その2羽がちょうど飢饉という時に再

び出会い、虫を食らう鳥は肉を食らう鳥に自らを食らうよう促したものの、肉を食らう鳥は応じようとしない、そこへやって来た一頭の獅子が2羽を一息に呑みこんだ——というこのようなものであった。彼らの議論は常にその単一の内容を巡って行われ、彼らは議論の焦点を僅かずつ無意味にずらし、その事により再び議論の種とする事を歓迎とし、彼らはその議論を有意味で、しかも想定された目的——それは想定されたと想定されているのみで、実は想定すらされていなかったのだが——に向かう明確な「前進」であるとしていた。彼らの1日の議論の終結は、彼らそれぞれの「意見」の内、殊に議論の焦点となる部分、殊に彼らが意見を異にしている部分を排斥する事により「妥協」する事で成され、彼らが彼らの「生涯」に、又「愛」に、更には「生きる事それ自体に於ける素晴らしさ」というような類の事に対するのと全く同様の技術で、その事の「素晴らしさ」を感じさせた。彼らはそうして毎日のように議論を行った。

第2に、彼らは議論とは別に、木を切りつつ互いに計算を行っていた。計算を行うその理由について、彼らは彼らの議論を行う事に対するそれと同様に、その目的と関連付ける事でそれを感じていたのであるが、しかし、彼らのその作業は最終的に、彼らの穏便故に幸福な生活の全てを破壊する要因となった。その理由は以下の通りである。

彼らは最初、お互いに加法の計算を行っていた。しかし、彼らの行う計算は回数こそ有限であるが故に——有限ではあるのは又、無論の事必然の結果なのであるが——そこにある規則性が伴わざるを得なかった。それは即ち、彼らの行う加法の計算の和が、常に113以下となる、というものであった。78 + 12 || 90、34 + 69 || 103、45 + 48 || 93、……規則に従い加法の計算は続いていたが、ある時、兄弟の兄はその規則を

破ったのであった。兄はある時、 $46 + 68$ の計算を行い、その和を114、と出した。しかし弟はその和に異論を唱えた。弟は和は13である、と言った。兄は何をいう、114に決まっているではないかと弟を咎めた。しかし弟は、自分は今までの規則に従って計算をしたのみである、と主張した。兄は弟に対し、自分は常に通常の加法を行ってきたつもりだが、と云った。すると弟は「やはり思った通り」という様子を見せ、兄に向かって自らの今まで従ってきたという計算の規則を説明した。その規則はある1点を除いて兄の規則と同様であった。ただ1つ、113以上の数同士によって行わない減法の差に於いては、それを必ず13とする、というただ1点を除いて。兄弟はこの事件をきっかけにこれ以上の減法計算を日々続けていく事を断念し、翌日より乗法の計算を始め

常にもやはり、ある一定の規則性は必然的に伴っていたのであった。それは即ち、彼らの行う減法の計算が、常に113以上の数同士によって行われる、というものであった。 $651 - 98 \parallel 553$ 、 $286 - 189 \parallel 97$ 、 $512 - 246 \parallel 266$ 、……規則に従い減法の計算は続いていたが、ある時、兄弟の弟はその規則を破ったのであった。弟はある時、 $112 - 5$ の計算を行い、その差を107、と出した。しかし兄はその差に異論を唱えた。兄は差は13である、と云った。弟は何を言う、107に決まっているではないかと兄を咎めた。しかし兄は、自分は今までの規則に従って計算をしたのみである、と主張した。弟は兄に対し、自分は常に通常の減法を行ってきたつもりだが、と云った。すると兄は「やはり思った通り」という様子を見せ、弟に向かって自らの今まで従ってきたという計算の規則を説明した。その規則はある1点を除いて弟の規則と同様であった。ただ1つ、113以上の数同士によって行わない減法の差に於いては、それを必ず13とする、というただ1点を除いて。兄弟はこの事件をきっかけにこれ以上の減法計算を日々続けていく事を断念し、翌日より乗法の計算を始め

た。しかし、そこにもやはり、ある一定の規則性は必然的に伴っていたのであった。それは即ち、彼らの行う乗法の計算の積が、常に113以外である、というものであった。 $9 \times 12 \parallel 108$ 、 $3 \times 7 \parallel 21$ 、 $12 \times 5 \parallel 60$ 、……規則に従い乗法の計算は続いてきたが、ある時、兄弟の兄はその規則を破ったのであった。兄はある時、 $14 \cdot 125 \times 8$ の計算を行い、その積を113、と出した。しかし弟はその和に異論を唱えた。弟は積は13である、と言った。兄は何を言う、113に決まっているではないかと弟を咎めた。しかし弟は、自分は今までの規則に従って計算をしたのみである、と主張した。兄は弟に対し、自分は常に通常の乗法を行ってきたつもりだが、と言った。すると弟は「やはり思った通り」という様子を見せ、兄に向かって自らの今まで従ってきたという計算の規則を説明した。その規則はある1点を除いて兄の規則と同様であった。ただ1つ、積が113になる乗法に於いては、それを必ず13とする、というただ1点を除いて。兄弟はこの事件をきっかけにこれ以上の乗法計算を日々続けていく事を断念し、翌日より除法の計算を始める事とした。しかし、加法であれ減法であれ乗法であれ、又最後に残された除法であれ、これまでのように日々計算を続けていくという事がそれ自体として不可能である事を、彼らはこの時既に予感していたのであった。しかも彼らの弟は、来るべき事態を既に悟つてさえた。自分が次に、 $630 \div 5$ の商を126と出し、兄の従っていた規則——恐らく、商から13を引いた数が113になる商については、必ずそれを13としておくという——によって、本来自明である筈の答に対し、またしても異論を唱えられるであろう事を。実際、兄も自らの規則を弟によって咎められるであろう事を、この時予知していた。最早、これまでと同様の生活を継続させる事が不可能である事を、彼らは互いに知っていた。遂に最後に残された除法を始める事となったその日、まだ陽の昇らぬ明け方に、彼らは前日の晩それ

ぞれ寝床に用意していた斧を持って起き出し、互いに相手を打ち殺そうとばかりに襲いかかり、遂に闘の中で「打ち違え」となったのであった。

この世で最初の樵の兄弟はそのようにして死に、この世で最初の百姓の兄弟こそが、我々の真の祖先なのである。――

メフィスト博士のタベ

さて、この記は一青年の哲学的誕生の記とでも言おうか、又は「正気」へと至る道の記述と言おうか……ともかく俺達が何と言おうと、端から見ればおよそ「正気」ではあるまい、寧ろ邪悪な「狂気」の発生へと至る道、又は幾分大目に見たとて、廃人によるとんだ茶番と言ったところだろう。この青年をその世界へと導いたのはある一人の博士であり、青年を博士の下へ導いた者こそ、この青年の愛する恋人であったわけだ……

青年ファウスト、メフィスト博士の研究室にやって来る。メフィストは左手の人差し指と中指とを絶えずすり合わせながら、右手にペンを持ち、机に向かって、何かしら書き物をしている。

ファウスト「(憔悴しきった様子で) 博士、よろしいでしょうか」

メフィスト「(肩間に刻まれた縦皺を神経質そうに震わせながら顔を上げ、) 何だね？(腕時計をみて) 出来れば210秒くらいに切り上げて頂きたいのだがね。今日の予備時間は、後370秒だ。内150秒は私の神経症用だ。」

書棚の本の背表紙に各列一冊ずつ触れた後、時計の表面に裏表合わせて20回ずつ触れる、そして扉の表面に裏表合わせて60回ずつ触れる、その他様々だ。残りの10秒は、時計を見る時間だ。」

ファウスト「ああ、博士、どうか聞いていただきたいのです……」

メフィスト「その事に関しては、私は既に同意していたつもりだったが。」

ファウスト「私の恋人が、今朝の7時34分56秒きっかりに、死んだのです……ああ、何とかという病気で、以前から危ないとは言われていたものの、やはり私にとっては実に、突然の事態に他ならなかったのです！
私はもう何も要りません、ああ、彼女を除いて外にはもう……ああ、私は全てを消してしまいたい、皆
眼の前から全く無くしてしまいたいのです……ああ！」

メフィスト「君、先ずは眼を瞑りなさい。」

ファウスト「(実際に眼を瞑って) ……ええ。」

メフィスト「これで、もう何もかもいいだろう。」

ファウスト「(眼を開いて) 博士、何とおっしゃいました？」

メフィスト「何をするのだ、君。又すつかり、元に戻ってしまつた。」

ファウスト「何がですか？ ああ、博士、こんな時に私を莫迦になさるおつもりですか？」

メフィスト「君が眼を瞑っていた時、君の言った事は確かに実現していた。」

ファウスト「何をおっしゃいますか？」

メフィスト「全てのものは、消えたるう。」

ファウスト「ただ、目に見えない、それだけの事でしょう」

メフィスト「見えなければ、ない事と同じではないのかね？」

ファウスト「違います」

メフィスト「では、君が眼を瞑っている時、君は世界の存在を如何なる方法で知り得た？ 又、証明し得たのだ？」

ファウスト「眼を瞑っている時にも、博士のお声は、確かに聞こえていました。」

メフィスト「声が聞こえるというその事が、私という存在の直接的な証明になるのかね？」

ファウスト「無論です……第一、眼を開きさえすれば、それは、自明の事です。」

メフィスト「それは違う。君は私の声が聞こえているという1つの事実と、私の存在というもう一方の想定された事実とを、何かしら切り離し難い特殊な関係性として取り扱っている。そういう観測は、極めて非科学的だ。それに、今君が自明と言ったのは、君が眼を開いているその時にこそ私が存在する事が自明であるという事であつて、眼を瞑っているその時にどうなのかという私の質問に対する答えにはなっていない。それに君、考えてみなさい、第一、君が眼を開いてそこに私が見えたとして、そこに私がいる事が自明などという事はあり得ない。その事を知る手掛かりは、君の日常生活にも無限に隠されている筈だ。例えばこんな事がある、『黄疸にかかった人には何でも黄色く見えるし、星やその他きわめて遠くにあり物体は実際よりずっと小さく見える』——。」

ファウスト「ああ——それでは博士、この世には何一つ確かに認識せられるものはないと、そうおっしゃるのですね？」

メフィスト「そうだ——それを君に悟らせたがために、私は貴重な時間を費やす覚悟を決めたのだ。」

ファウスト「ああ、何という事だ……しかし博士、掛け替えの無い恋人を失った私は、どうなるのです！ 博士の

貴重なお時間という事はともかく……理解してはいますが……ああ、私は一体、どうしたら……」

メフィスト「彼女を愛するという事に、何か意味があったのかね？」

ファウスト「意味も何も……彼女は、私の全てであつたのです。」

メフィスト「君が彼女と出会つたのは、一体いつだね？」

ファウスト「3年前です。」

メフィスト「ではそれ以前、君は何のために生きていたのだね？」

ファウスト「博士、何と？」

メフィスト「君は君の全人格に於いて、彼女と出会う以前に、何の目的を有していたのかね？」

ファウスト「それは、無論、学問です。」

メフィスト「では、彼女に出会つた後、学問は君にとって些末であつたのかね？」

ファウスト「いえ、そうではありません。」

メフィスト「では、彼女と学問との、両方が君の目的であつたわけだね？」

ファウスト「彼女は目的などではありません。」

メフィスト「では、何故彼女は君にとって重要であつたのだ？」

ファウスト「私の生きる理由そのものであつたのです。」

メフィスト「学問も同様かね？」

ファウスト「はい」

メフィスト「彼女に出会う以前は、学問のみが生きる理由であつたのだね？」

ファウスト「ええ」

メフィスト「では、学問を知る以前は？」

ファウスト「博士、何と？」

メフィスト「君は、何のために生まれてきた？」

ファウスト「それは、気が付いた時には、既に生まれていました。」

メフィスト「君は恋人を失つた。しかし君は恋人こそ失つたものの、学問があるのではないのかね。」

ファウスト「学問と彼女とは、異なります。」

メフィスト「彼女は学問よりも、君にとって重大であつたのかね？」

ファウスト「重大というよりも……私は彼女を、誰にも、いえ、何にも増して愛していたのです。」

メフィスト「君は気付いた時には、既に生まれていた。その時君に生きる理由はなかつたが、後に学問という形で、それは見出された。しかしそれとは全く異なる次元に於いて、君の彼女へ向けられた愛という意志は、

彼女が存在しているその時には君の全人格に於ける“生きる理由”であり、又、失われた瞬間、即ち今

となつては、君の全人格に於ける“生きる理由のない理由”となつてゐる。いいかね、君、彼女に会う以前と以後、彼女が存在していないというのは共通した事実だ。」

ファウスト「ええ」

メフィスト「君の精神及び意志は、私に完璧に理解し得ないわけではない。寧ろ、私の純粹に科学的な観測によつて、君の精神は既に、マクロ的には分析済みだ……まあ、それはいい、それよりも君が私の部屋に入つてから、既に220秒が経っている。又今度にしよう。」

ファウスト「分かりました。それでは、失礼します。」

ファウスト、メフィストの部屋を出、階段を下り、表へ出る。

ファウスト「ああ、博士は一体何を言っていたのだろうか。しかし、博士の最後の言葉は、成る程、確かにそうだったのだ……生まれた時、俺に生きる理由は確かに無かった。つまり、それはなくともよかつたのだ。さて、それではどうして後に、学問という形でそれは見出されたのだろうか……そうだ、父親に度々、お前はきつと学問をするのだと、俺はまだ小さな頃から言われていたのだ。しかし、それがなければどうだつたらう。学問を目的にしただらうか……しなかつたならば、俺は一体どうしたらう……いや、しなかつたにしても、何らかの手掛かりがなければきつと目的など何もなかつたのだ。自分の意志に従つて、というような事も、無論無かつた筈だ。意志を形成するのが、第一に外の、即ち俺の外部による仕

事であつて、そうだ、それを決める自由は個人にはない、即ち、それは俺にもなかつたのだ……そう言
 えば、博士は最初にも何か妙な事を言つていた……そうだ、思い出したぞ、そして、分かつた！ そう
 だ、俺は今、ニューヨーク在住の会社員、トーマス・シンプソンを知らない、それなら、俺にとつてト
 マス・シンプソンは存在しないのと同じじゃないか！ それに、この世界というのも俺が知るかぎり
 おいてなのであつて、それは同時に、俺の知っているこの世界がすっかり俺の頭の中のもの、俺の世界
 という事になる！ しかし俺が死ねばそれはすっかり再現不能になり、しかも世界は未だ続いていると
 きている、これは恐ろしい矛盾じゃないか！ そこで俺はこう考えざるを得ない、それらの世界が全く
 別のものだつて！ 実際に「実存」している不変の世界と、俺やあいつの持つている、確かに「実在」は
 している世界と！ これで説明がつく！ これが博士の言つていた純粹に科学的な観測という奴か、まあ、
 多少異なる気もしないではないが……まあ、いい。ふん、もう、恋人も何も知つた事じゃない、俺はこ
 れで誰よりも人を知つてゐる！」

ファウストは実に踊るような足取りで往来に出て行つた。

それ見たまえ、最後のところなど、この青年が「廢人」になつてしまつたという事を、実によく表わしている！
 全く、何が『実に踊るような足取り』だ、そしてこいつもきつと、左手の人差し指と中指とを絶えずすり合わせ

ながら、「狂人」への道をまず、踏み出したというわけだ。

User Kampf—安樂椅子哲学者—

ある探検家の話だ……

「私のしてきた奇怪な体験と言ったら……ああ、貴方に、体何と言って説明したらよいのでしょうか、ともかくおかしいのです。奇怪なのです、狂気なのです、しかも後もう少しで、私にまでその狂気が感染るところだったので、あの全く不気味な部族と言ったら！先ずその格好から言って実に奇妙なのです。我々の文化からは、恐らく想像さえ出来ないと思われます。今でも炬火を囲んだ奴等の雄叫びが聞こえてくるようだ！ああ、あの気遣いじみた風俗、狂癡の舞踊！そして彼らの恐るべき社会構造、慣習、身分制度、そして世にも奇妙な不文律「掟」の数々……彼らの社会には、あの「当為」というものがちやあんと含まれているのです。それは全く、魔法のよう……ともかく彼らは、あの全ての人民が暗愚で聊爾で思慮に足らぬ彼らの一族は、正気ではありませんまい。あんなものを信じているのは、きっと魔法をかけられたのに違いないのです、それはしかも見たところ、主に彼らの両親によって、彼らがまだ幼く、一枚の紙と同じである頃に、行われているように見えるのです、ああ、魔法はその紙に恰も絵を描くようにかけられるのです……しかも、彼らの両親は彼らに魔法をかけているという事さえも、自分で気付かないようなのです。何故なら、彼らの両親はそのまた両親から同じように魔法をかけられ、

しかもそれに気が付かないようであるのです……ああ、考えるだけでも悍ましい、しかもここでその事について口を開く事さえも、私にはこの上なく大きな苦痛なのです……ああ、申し訳ありません、少々興奮が過ぎたようです。ええ、その魔法というのは……ああ！そうです！その魔法というのは彼らの「行動」を——「行動」というのには勿論彼らの言語活動も含まれるばかりか、彼らの脳内に於いて行われる思考という事にまで達しているのです——対象にするばかりでなく、「行動」を技術にもしています、即ち、彼らの両親が彼らに魔法をかける際唱えられる呪文は、そして儀式は、「行動」に他ならないのです……ああ、恐ろしい、こうして次々とかけられていく魔法のかけられる事を、彼らのある精神分析者は〈環境学習〉だとか〈同一視〉と呼んでいます。その魔法が彼らにとって決して有意義なものでなく、寧ろ巨大な虚構であるのは無論確かなのです、ですが……ですが、それは同時に彼らが彼らであるために、彼らとして存在するための不可欠な条件であると考えられているようなのです……しかし、我々の目から見ても、確かにそれはその通りなのです、ただし、私が——恐らく頭が「正気」である全ての人は同意してくれると信じていますが——それを彼らの無意味な、少なくともどうでもよい、時折ご婦人方に見られる不格好な装身具のような性質と見るのに対して、彼らはともかくそれを賛美し、そればかりか、それを魔法ではなく飽く迄も自分達の「意志」によって見出した「お気に入り」であると信じ、殆ど疑おうとしません……しかも彼らはその「お気に入り」を公共の場で誰にでも同意される用語として体系化し、又「お気に入りでないもの」も同じく体系化し、さらに実際には少しずつ異なっているはずである自分達にかけられた魔法による作用を、「普遍的な性質」として誰にでも同様の原理として共有されるものだと考えるのです……それは彼らの間で「Denker」と呼ばれている知識人にしてもそうなのです。彼ら「Denker」は、「当為」や魔法に

よって条件付けられた様々な事柄、それにその全てが実におかしな彼らの「社会」をあるべき「必然」と定義する努力に励んでいるようなのです。そして彼らの「経済」とか「歴史」とか「法」とか、彼らの根本にある魔法とは間接的にしか関わらない問題を、強調する場合が殆どなのです……そして彼らの中で魔法に最も近い人々は「何をすべきか」という無意味な問いを多くの場合繰り返し、「何であるか」というような問いはごく少数の人に過ぎられているのです、剩え彼らは彼らの根本的に無意味な社会の中で魔法によってそうであると感ずるよう条件付けられた事柄について体系化された「お気に入り」やそれに近いものを「価値」と呼び、その全てが無意味である事を説明しようとする試みを「ニヒリズム」と呼び、しかも彼らは彼らの魔法をではなく、寧ろ彼らの「価値」についての考察に根本的無意味を観ずるのです……しかも彼らは「お気に入り」と感じている中でも最も極上というものを自分達の「意志」とは関連せず存在する原理であるとして崇拜し、「愛」だとかいう風に命名し、やはり公共の場で通ずるようにします。彼らはさらに「法則」や「規則」というようなものを考えて、それを「普遍的」な「事実」であるようにし、それを極上の「価値」の存在する証拠であるとするのです……そしてそれら何れも、全て彼らの魔法によるものだとはい、一向に気付かない様子なのです！彼らの見出そうとして「お気に入り」や「価値」や「意志」や「普遍的」は、勿論根本的に無意味な世界に於ける事なのですから、そんな事に勿論全く意味は無いのです、けれども彼らはそれをします……勿論それは彼らがそう語るように彼らの「意志」や「欲する」事、「感ずる」というような彼ら自身の「神秘的な本質」による「神秘的な真意」がそうさせているのではありません、「する」事自体が「する」事自体を理由に、「する」事としてあの魔法によって無意味に、そして無目的に条件付けられているからなのです……彼らにかけられた魔法は彼らの両親からだけでなく、

無論彼らの接する様々な他者、或いは物に、つまり彼の認知し、見た全てのものによってかけられ、彼らも同じくかけているのですが……彼らはそういった魔法の「相互作用」によって動いています、無論、彼らが大本面目に信じているような自身の「意志」による「決定」「判断」というような事ありません……勿論、「感ずる」事や「意志」は事実として存在します、しかしそれは彼らの内にある神秘的な「本質」「真意」によるものでなく、彼らの外から来た魔法によるのです……ああ、何度も言いました、彼らの魔法には元から意味はありません、しかし気が付いてみると、彼らの中には既にそれがあつたのです……そしてその魔法なくしては彼らの狂気は、彼らの「人格」はないのです——何故なら彼らの「人格」は魔法によって構成され、それ以外によつては決して構成されないのですから、そしてその魔法の正体とは、他者であり物であります、つまり彼らは自己でなく、それ以前に他者であり物の性質なのです——そうした虚構により、虚偽により、何より壮大な「虚無」の内にあつて、彼らははじめて「いる」のです、それはつまり「自覚」する事であつて客観的には勿論「ある」のです……ああ、ああ、ああ、何という事か、哀れな部族、狂つた部族、呪われし一族……ああ、私は一体何を言つていたんですか、さつぱり分からなくなつてしまつた……あれはもしかすると、私の故郷だつたのではありますまいか？ 異文化にしては実にどこかであつた気がするのです……宛ら既視感のように……そうです、遙か昔、私もあの狂気の中にいたような心持がどこかしかないのです、それにあの氣違い踊りも、変に懐かしいようなのです。ああ……ああ、どうか教えて下さい、後生です、お願いします！

全くご苦労様というものだ、しかし残念ながらあなたは世に言う氣違いなのだ、さあ、早く、この部屋に入りなさい……さあ、お医者さん、急いで鍵をかけておしまいなさい、あいつはもう氣違いで何をするか分かつたも

のじゃありません、第一奴は最早世の中で機能的になれなくなった廢人です、急いで早く……。やれやれ、全く、しかし實際こんな事は滅多にないのだ。自分の生きる社会を、世界を、これまた上手く解釈したものだ、全く見事な文明批評というやつだ……實際、あんたの見ていたのはまさしく現代社会、近代国家のあり方というようなもので、そんなような場所だ、お前は第一そこで飯を食い、寝起きしているのだ、お前の今入った格子のついた病室もそういう意味では変わったものではないのだ……そして大方、俺もあんたの肩を持つとしようか、これからは俺達の秘密の花園で、楽しく暮らしていくとしよう。

アーシャーガ堤防

男はアーシャーガ堤防沿いの道を歩いていた。夜のアーシャーガ堤防を青白い、仄かな月明かりが照らしている。

——ここはアーシャーガ堤防だ、しかし、アーシャーガ堤防なのかどうかは、實際分らないのだ。

男は思った。何故なら男の歩く道の左側に連なる、その高くなった部分が堤防であるのかどうか、男は確かめた事が無かったのだ。ただ、遠くに橋が見えた。赤や白の光を放つ点がゆっくりと滑るように、時には幾つも続けて、その橋を横切っていく。それが橋を渡っていく車の灯りであるのか、それとも別のものであるのか、男は確かめた事が無い。

——何でもいい……そう、何でもいいのだ。ただ一つ確かな事は、俺は1人なのだという事だ。

アスファルトの車道の表面に半ば浮き上がるようにして、アーシャーガ堤防沿いのこの道を遙かな先まで続いていく白線。車がこの道を通る度に、灯りがその白線を、そしてアーシャーガ堤防を照らす。

この土地の気候のせいもあるのかもしれない、男はアーシャーガ堤防沿いのこの道の匂いについて、そう考えた事があった。アーシャーガ堤防沿いのこの道には、ある独特の匂いがある。雨の匂い、というのがあった。その湿った匂いが時間と共に褪せた、そんな匂いが常にこの道にはあった。

湿った夜風が吹いていた。

——俺はいつからかこんな道を歩くようになった……いつからか。それよりも、これは本当に堤防なのだろうか……あれは車なのだろうか、……ああ、俺はどうしてこんなにも虚しいのだろう、切ないのだろうか。

この道を度々、何度となく男は訪れた。それは決まって夜であった。男は歩いている。また、車が男を追い抜いていく。アーシャーガ堤防沿いのこの道を歩く人影は、男の他にない。

——この道を歩く時、何故俺は決まって1人なのだろう。

道の脇に群生する植物は、決まって春の中頃から初夏にかけて生えるものだった。闇の中、時折通っていく車の灯りが、名も無い草の濃い黄緑色の葉を照らす。

車道は男から向かって右側にある。車道の中央に引かれた白線の向こうにふと目をやる。男は闇の中に朧な輪郭を浮かび上がらせるそれを見た。それは道路標識のように見えた。しかし、それも間もなく見えなくなる。男は歩いている。

——ミネルヴァの梟は夕暮れに飛び立つ、か……。俺が夜にしかここに来ないのは、多分そのためなのかもしれない。

車道を挟んだ右側は、坂になっている。そちら側にも堤防側と殆ど同じ植物があるのだという事を、男は知っていた。やはりそれも、道を通っていく車の灯りの中に、垣間見たものだった。

——いや、違う。俺は決してそんな考えに浸っているんじゃない。ただ……そうだ、ただ、寂しいのだ。

車道の右側から、かなり下った場所——男のいる場所からは殆ど見えなかったが、そこには線路があり、電車が通った。男はその電車の走るとどつ、どつという断続的な音を何度となく耳にし、窓から漏れる灯りを何度となく目にした。今、そこに電車の影はなく、ただ民家の微かな灯りが見えた。

——ここには退屈も何も無い。娯楽も生活も、楽しみもない……ただ、寂しくてならないのだ……それで十分なのではない……何もかも、それきりで沢山なのだ。この褪せた雨の匂いの中で、俺はただ、寂しくてならないのだ。

アーシャーガ堤防の草が、夜風に揺れる。男は顔をあげる。樹木が数本、車道を挟んだ向こう側に並んでいるのが見とれた。男はまた、顔を下ろす。男は歩いている。風が一時止む。次の一瞬には、また吹き始める。その刹那、男は再び顔を上げる。

——そうだ……そうなのだ。

男の歩く道から大分下った線路の手前に、高い塔が連なっている。細い鉄の棒を無数に組み合わせたその塔は、闇の中に屹立していた。

——ここはいつでも寂しいのだ。

高い塔の至る場所に、赤い小さな灯りが、ゆっくりとした、しかし短い周期で点滅を繰り返していた。その塔から塔へと通じる細い電線が闇の中に確認出来た時に、男はその塔が何の目的からつくられたものであるのかを、気付いた。

——俺には、3つ世界がある。

微かに、湿り気を孕んだ外気が感じられる。一面の漆黒に刷かれた夜空に月が浮かび、そこに微かな紺青が差しているようにも思われた。幾重にも重なり合い垂れ込める雲の合間に刷かれる漆黒が、そこに於いて、一層その濃さを増しているかのようにもあつた。

——1つは俺の両親のいる世界なのだ。そしてもう1つは、俺の学問を志す、その世界だ。

その空に今、地上から一筋の光が差している。それが何によるものであるのか、男には分からない。

車がまた1台、歩いていく男を追い越していく。半分程雲に隠されていた月が、一時その姿を完全にあらわし、かと思ふと、それはまた垂れ込める雲の中に沈み、青白い、朧な光を放ち始める。

——俺の両親のいる世界というのは……それは俺の帰属感としての世界なのだ。そして学問を志すというのは、俺の夢なのだ。

夜は更けていく。風は微かに吹いている。アーシャーガ堤防は彼方へ連なっている。男は歩いていく。

——もう1つの世界というのは……他の何物にも一切の関係なく、ただ、俺の向かっていく場所だ……それは、俺の真に求めるものなのだ、いや、俺だけではない。畢竟同じなのだ……皆そうなのだ……最後には同じなのだ

……。

どどっ、どどっ、……聞こえてきた音に男は顔を上げる。遠い線路の上で、その電車は男を追い抜いていく。窓から漏れる灯りが遠ざかり、やがて見えなくなる。

——それは醜かろうが、構わないのだ……それには善も悪も無い……真に公正な判断さえないのだ……ただ、それは美しいのだ、そして、尊いのだ。

灯りの見えなくなった後で、音が遠ざかる。それは徐々に薄れ、遠ざかる。微かな余韻を残し、それはアーシャーガ堤防沿いの道を離れる。

——そして俺は歩いていくのだ、……所詮繰り返される事であろうが、陳腐であろうが、俺にとってそれは唯一の、かけがえの無い事なのだ……この事をどこの誰がどんな風に説くか、それは知った事ではない、しかし俺は追って行くのだ……そしてそれ故に俺はふと、この道にやって来るのだ……ああ、月よ、俺の道を照らしてくれ。雲に深く沈んでいた月が、その時再び、姿を表した。その時男は、月明かりの中にいた。

1個の熱い塊が、男の胸から不意に駆け上がったかのようなだった。男の視界の中で、アーシャーガ堤防を照らす青白い月が不意に滲む。男は歩き続ける。

アスファルトの道が不意に、新しい光によって照らし出される。男は振り返った。車がまた、男の横を過ぎていく。車窓にふと垣間見た姿に、男は僅かに、その手を伸ばす。

男が我に返った時、車の影は既に、見えなくなっていた。男はまた手を下ろし、歩き出す。

——やはり……やはり、虚しいのだ。

男は歩き続ける。

——やはり皆、ここにいるのだ……互いに見えないだけの事だ……誰も3つの世界を生きているかもしれない、けれどもそんなものは皆、小さな、儚い夢に過ぎないのだ……皆このアーシャーガ堤防にいる、しかしここでは誰も見えはしない……互いに見る事さえもかなわないのだ……けれどもそれが本当なのだ……寂しくとも、真実なのだ……ああ、俺の願いにしても、こんな愚にもつかない考えにしても、こんなにも空虚なのは何故だろう？

月は再び雲の内へ沈む。雲は空の海に浮かぶ静かな紺青の波のようでもあった。

——そしてアーシャーガ堤防も夢も、その内に皆無くなってしまふのだ、そしてそれは些末なのだ……けれども俺はその間にでも、きつと全ての夢を見尽くしてしまいたい……。

男は歩いていく。

アーシャーガ堤防を月が照らす。

第二部

〔編集者註〕 著者自身による「形式主義文学」の時期区分における「中期」に当たる。

「麦秋と憂い」・「花と幻想」・「夜の狩人」の三部作を中心とし、形式主義文学として、「そのイメージは完成された」と自ら評価づけている。

麦秋と憂い

麦穂ならば皆乾きし黄金に染まり、青年はただ嗅いだのみでその黄金を髣髴とさせる風の吹く、涼しき朝を麦畑治いに歩む。

霧を思わず白い光、朝陽を浴びる地より立ち昇る。陽に照らされし土白く光り、その光、白く陽炎の如く立ち昇っている。強き朝陽に照らされし風景であるにも拘わらず、それは宛ら霧の中である。

東に低く昇る日、今まさに青年の正面に位置する。

この景色既に、半ば青年の幻想の内にある。

——纏綿たる闇の内から不意に現れ出る奇跡とも呼ぶべきかの旋律……あの芸術を、あの楽章を、ああ、俺は如何に愛した事か……月明かりに照らされし宮殿の広大な、いや、まさに渺茫たる中庭……湧き出す泉のほとりに立つ女神の像の肩で、梟は羽を休める……傍らに立つ將軍の像は、ああ、遠き日に呪われし一族の城を守り、弟と討ちちがえとなつたかのターバイの王ではないか……月明かりに照らされし情景……渺茫たる中庭……茂みに潜む目……繰り返される旋律……ああ、その旋律が現れ出る度に、我々はまた新たな門を潜り抜け、次なる闇へ墜ちてゆく……ああ、偉大なるイラストラアス！過去の完成者であり未来の創始者であるお前の出現を、我々は心より待ちわびていたのだ！

青年我に返り、ふと気付けば自らの姿麦畑沿いの朝にあり。青年顔を上げ、麦畑に不意に姿を現したる人影を見やる。農夫かと思いきや、思いがけずそれは案山子である。青年、またも幻想に耽る。

——そんな中庭を、俺は羽を生やして飛んでいく……俺は愚かでない、あの天道になど近付きはしない……そのかわり俺はあの月まで行ってみよう……その晩月は青白く光り、楽章は、旋律は、神聖な瞬間の近付きつつある事を逸早く察し、その声を潜める……そして神聖な瞬間の訪れを待ち、旋律実に頂点に達す！しかし俺は間も無く、まっしぐらに落ちるだろう、青白い月はみるみる遠ざかり、俺はその瞬間、渺茫たる中庭をまたも垣間見る……そして泉に落ちるといふその時になって、俺は寝台から跳ね起き、窓から差し込む月明かりに気付くと

いう寸法だ……背中をさすってみても、羽は見当たらず……しかし、何、俺は白い羽しか気に入らぬというわけでもない。

青年、またも我に返り、しかし不意に先程の幻想の事を思い出す。青年は地を蹴り、宙に跳び上がる。しかし青年は月を見る事無く、地に倒れ伏す。すると青年の目に、道端に花広げる小さき一輪、止まる。これを見、青年再び幻想に立ち返る。

——はて、この花は不思議にも、俺の過去を想起させる……そうだ、俺は恋人に裏切られた……いや、しかし裏切られたと一様には言えない、あの娘は幼かったのだ、俺の言葉も何も、あの娘ははっきりとは呑み込めなかったのに違いあるまい……しかし俺はあの娘の為に、よく曲と、そのための詞を書いたものだ……さて、どのようなものであったか、一向に思い出せぬ……そうか、そうだ、あの娘の風になびく髪が夕陽に照らされたところ、俺もまた黄金に照らし出されるというのだ……成程、実に滑稽なる一句ではないか！ そう言えば俺は、俺のあの娘に対する様々なところを黄金のものと、そう形容した事があった……成程、俺と黄金とは何か密接な関係があるものと見える。

青年、またも爰畑を見やる。青年、しばしその黄金の原に目を落とす。

——ところで、俺があの娘を愛したという事は、果たして完全に無駄であつたと言い切れるだろうか？ いや……こんな時にこそ実に弁証法だろう、つまりあの止揚と言うやつだ！ あれは俺にとつて必然的な過程だつたのだ！ 今の俺によつて過去の俺が否定されたわけでは決して無い、過去の俺は今の俺を形作るという点で有意味だつた。しかし……思えば俺が裏切られた試しはそれだけでない、俺は友にも、そうだ、あの男にも、又別な形で確かな裏切りを受けたのだ……しかし……俺にとつての最高の裏切りは……いや、俺は言うまい。それは俺が古来最も親しみを感じた人間による裏切りだ。以来、俺はこの世に何を求めぬ……求めぬという事は、即ち裏切られもせぬという事だ、何、俺はもう裏切りに耐えられぬだけの事だ……第一、もう俺には全て分かつてしまつたではないか。

青年、我に返る事をせずにいる。黄金の麦穂、なおも風に揺れる。青年、不意に自らにまつわる根元的命題を想起する。

——そうだ、俺にはもう何もかも分かつてしまつている……俺の発見は、自然法則の分析による選択によつて公理付けられた方法で、最早完成されている……そうだ、意志は無く、目的は否定され、個人による決定能力はその根本的作用の段階から批判され、否定される……それが……真理なのだ！……ああ、神よ、一時の気の迷いから……かの日々の瞑想の内に在つて……俺は罪を犯した……解を、全てに於ける解を、知つてしまつた！

青年、麦穂を見やる。次の瞬間、青年、不意に古来あり得ようはずもなかった感覚に満たされる。青年の胸より熱き塊駆け上り、青年の全感覚、全精神はその感情に満たされ、青年は地に倒れ伏す。

——「一粒の麦もし死なずば、一粒のままにてあらん。しかし一粒の麦もし死なば、多くの実りをもたらすなり」……

麦穂ならば皆乾きし黄金に染まり、青年はただ嗅いだのみでその黄金を髣髴とさせる風の吹く、涼しき朝を麦畑沿いに伏す。

花と幻想

「これは、ここで一番大事な花です」

その声を耳にしたように思い、ラーレンは目覚めた。目の前に立つ園丁は、その事には一向気付かぬ様子、ただ何かしら一人呟いている。

「もしもし」その声にも気付かぬ様子、園丁はなおも一人呟く。「もしもし」、先程より幾分か声を高めた所為もあろう、その呼びかけに園丁は振り返った。

「ああ」園丁はそう叫んだ後振り返り、「貴方はどなたです？」こうラーレンに問うた。

「私は学生のヴィヒ・ラーレンです」ラーレンは答え、その時になり、自らのこの農園を訪れた経緯を想起した。

ラーレンは聖なる書の聖なる最初の一句が如何にあるべきか、それを自らに問うた。太初に言葉ありき——否——太初に意味ありき——否——太初に力ありき——否——太初に業ありき——否——それら皆彼の胸に落ちず、ラーレンは何時しかこの農園の門を潜り、咲き誇る妖しげな花々を見つつ、そこに眠っていたのだった。

「いえ、すみません、あまり綺麗でしたもので」ラーレンはそう云いつつ、立ち上がり、「居眠りをしました」こう云った。

園丁は汚れた青い上着を着ていた。ラーレンを見遣り、「そうですか」そのまま歩み去ると思われた後、再び振り返り、「どうです、もう少しこの花を見ていきませんか？」そう云った。

元よりラーレンは花を見ていたのではなかった。しかし園丁の言葉に肯き、「有難う、そうしましょう」云いつつ、園丁の後につき、「ええ、拝見しましょう」そう云った。

園丁は妖しい花々の元にラーレンを導いた。

「どうでしょう、この赤いものなどは」

「これでしょうか」

「ええ、そうです、これです。これなどはなかなか価値のあるものです——どうです、茎が見事に透き通って——それに少しばかり輝いているようでしょうか？」

その事が何故に価値あるものか、ラーレンには不可解に思われた。

園丁はその先に導いた。

「この黄色のはどうです？ なかなか素晴らしいものでしょう」

「ええ、多分そうなのでしょう」

「これが何故に素晴らしくとお思いです？」

「さあ、一向に分かりません」

園丁はその先へ向かった。

「この三色すみれなど、如何でしょう？ これなどは」

「ええ、実に結構です」

園丁はそこで足を止めた。ふとその場に屈んだかと思うと、ラーレンを振り返り、こう云った。

「これは、ここで一番大事な花です」ラーレンは——その言葉こそ自らを目覚めさせたその言葉である事を——不意に思い起こした。

園丁の示した場所にその花は咲いていた。百合か、そうでなければチュウリップか——しかしそこに咲く一輪は、それらの花よりも一回りは小さきもの、しかしその美しさに於いては、それらと決して並ぶものでなかった。

その真白き花の一輪は、雲より差し込む黄金の日の光を受け、その内に静かに咲いていた。

その花は生命の美しさを象つたのに相違なかった。しかしそこには美しさ故の邪悪なるものの蠢く事が感ぜられた。その邪悪は人を欺く事にあると思われた——しかしその邪悪な欺きは、欺かれる事を故意にし、そのため生命を失う事があるとも、その快さのために、さして悔いる事もないように思われた。その快さは深く安らか

な眠りとも、男女の交わる歓びのそれとも異なる、何にも増して生命より遠く離れたものと思われた。それは或る夢に相違なかった。それは完全を手に入れる夢であった。完全である事、それはこの世に生まれぬ事、自らでなき事、動かざる事。――

ともかく妖しく言い知れぬその花は、その美しさに於いて欠く所の無いように思われた。

園丁はこう呟いた「これは〃太初のもの〃というのです」と。

ラーレンには一時、その名は実に尤もなものと思われた。しかし次の瞬間、彼は園丁にある憤りをさえ感じていた。彼にはその花を形容する事それ自体、愚かしき事と思われた。

「ですが実際、何とも云いようがありません」この言葉により、ラーレンは園丁を許し、さらには深い憐れみさえを感じた。

「これは、ここで一番大事な花です」園丁はまたもその言葉を口にした。

次の瞬間、園丁は高く叫んだ。

「ああ、光です、遂に降臨です」

「ええ、何が」

「光です、貴方にはあれがお見えになりませんか、あの光の網が」

「ああ……ええ、見えますとも！」

「ほら、その花ですよ」

「ええ……そうです！ 網はどうやら花から出るように思われます」

「そうでしょう、ほら、どんどん拡がっていく……」

「花の出した網に、天の光が降ります！」

「ほら、まだ貴方は一向真面目で理論家でいらつしやる、それではいけない」

「そうでしょうか」

「そうら、網は赤くなりましたよ」

「私には黄色く見えるようです」

「ええ、私には今青く見えます……」

「ええ、そうです！」

「どうです、素晴らしい！」

「そうです、実に素晴らしい！」

「そう言っている間にもまた広がるようですよ」

「ええ、実に美しい、黄色な火山が水色の溶岩を噴き上げたようです」

「けれども実は皆、光です……ほら、白くなった！」

「これが一番綺麗なようです」

「いえ、どれも実際素敵です！」

「切り拓かれるようだ！」

「実際駆け上がるようだ！」

「どんどん広がります、花の網が」

「私達の網です」

「それは光です、私達と共にあります」

「いえ、あれこそ実に真理です」

「太初にあつたものです、私は今それを確信を持って云えます！」

「ほう、実に華麗だ！」

「幽艶だ！」

「ああ、向こうの山の峰にかかった！」

「実際、もう空をうずめています」

「ほら、皆網に包まれている」

「網のようっていて、実際はやはり光です」

「何とも云い難いカーテンです！」

「ほら、だんだんあの網の目が狭くなっていきますよ……ほら、もうまるつきり空を覆ってしまいましたよ」

「空の天蓋、光の天蓋です！」

「月ではなくて光の網が、天蓋が、太陽をまるきり隠してしまつた」

「これはまるで一風変わった日蝕だ、ただ、太陽が隠れたにしては随分明るいなものだ」

「光が太陽をそっくり隠したんです……ほら、もう陽の光は大地に届きませんよ……」

「ええ、けれど構やしませんよ」

「勿論ですとも！」

「見なさい、この素晴らしい事を！」

「そうです、最初は皆闇だったのです、そこに陽の光なんて出てきたのです」
「それで居場所を争って！」

「この光が結局新しい太陽になるんです！」

「新しい世界、新しい娘です！」

「新しきエルサレム！ いや、ラグナロク後かな！」

「ああ、私は生まれて以来こんな感動に出会った事はなかった」

「だから貴方はここで働くのですね？」

「まさか！ こんな美しい花があるのに」

「こんな素晴らしい光景が目に来るばかりに」

「美しい花です」

「ああ、もうまるきり光は広がっています」

「実際おっしゃる通りです」

「そうら、もう光は眩しくて、私の目を先程から刺す程です」

「こうなってしまうば、もうじきでしょう」

「いいえ、まだでしょう、この素晴らしさでは」

「ええ、この景色では」

「ああ、何と云えば私の胸の内にしか在り得ない筈のこの感動を伝えられるのか……」

「私も実際、ずっとそう思ってきました」

「それでいつもこうして？」

「ええ、これは、ここで一番大事な花です」

「ああ、美しいこの花の幻術にかかっているうちに、もう夕暮れです……」

ラーレンは僅かな憂いを感じつつも、その場を後にした。「本当に有難う。さようなら」

「ええ、さようなら」園丁は農園の奥へ消えた。別れ際、ふと垣間見たその顔は、微かに青ざめているように思われた。

ラーレンは最後にもう一度かの花を振り返ったものの、そのまま農園の門を潜った。ラーレンは呟いた。

「ああ、あれが、あの花が太初である筈もなかった……完全なる、生命を遠く離れしものが、あれに宿る筈も……」ラーレン独り歩み去り、陽は遠き山に落ちかかる。

夜の狩人

夜行列車がその湿原を通りかかった時、ラーレナは眼の前に何やらおかしな光を見たように思い、それきり後の記憶がなかった。

湿原の傍に阿呆のように立ち尽くしていた男は、雫色の夏外套を羽織り、そこに立っていたラーレナの顔を見ると、親しげにこう云うのであった。

「どこまで行くんですか」

男の顔を見ると、それが歳を持たないという事が分かった。その男は白髪で、瞳がどこか蝙蝠めいていた。

「どこまで行くんですか」

男はどこか葦の中に立っているようだったが、よく見ると沼の中に居るようでもあった。ラーレナは問うた。

「お前は何をしているのかね」

男は笑った。男は外套の中に手を入れると、短い剣を抜いて云った。

「夜を狩るんですか」

男はそう云い、抜いた剣で葦を刈ってみせた。ラーレナも剣を抜いた。男はそれを見ると、先ず怯えきつた様子に、そして次には可笑しげな顔をした。

「旦那、あつしを斬るですって？ はあ、ちょうどいい、やって下せえ」

ラーレナは剣を振り下ろした。男は既にそこに居なかった。

沼沿いを暫く歩いていくと、ラーレナは又同じ男に出会った。

「旦那、あつしを斬れねえって事がお分かりでしょう」

男はラーレナを見やり、そのように云った。ラーレナは云った。

「ああ、俺は分かった。だから夜を狩るのを見せてくれ」

「へえ、お安い御用で」

男は先程の剣を抜き、飛び回り始める

男はそのうちにどこからか大きな皮袋を用意し、それを持って躍り回る

ラーレナ 何をしているのだ

男 へえ、昼を狩ってますんで

ラーレナ 何だと

男 へえ、間違えまして、夜を狩ってますんで

恐ろしい猛獣の唸り声聞こえる

第二部

男 しめた、かかりやがった

ラーレナ 何がだ

男 お待ち下せえ、旦那

ラーレナ あいつめ、何をするというのだ

男は葦の中に飛び込み、畏にかかった奇妙な猛獣を捕えてくる

ラーレナ それが夜を狩るという事か

男 違いますんで、これは食うんでして

云いながら男は沼の中に猛獣を蹴落とす

ラーレナ この男は気が違っているのだ

男 旦那、それが違ってねえんでして

ラーレナ それならお前はどのようにして夜を狩るのだ

男 こうしてでさ

ラーレナ 口で話すのだ

男 話してまさ

ラーレナ さあ、話すのだ

男 見て下せえ、こうして皮袋に夜をつめるんです

ラーレナ 何故夜を狩るのだ

男 へえ、領主様にお納めいたしますんで

ラーレナ お前はそんなものを納めるのか

男 納めますんで

ラーレナ そんな事はやめてしまえ

男 それが商いなんです

「これは何だ」

ラーレナは男に問うた。

「劇でして」

男は蝙蝠めいた眼でラーレナの顔を見遣った。ラーレナは再び問うた。

「これで夜を狩るといふのか」

「いやあ、これで狩れる者はいねえんです」

「ではどうして夜を狩るのだ」

ラーレナはその時駅に着いたものらしい先程の夜行列車を見遣った。

「それにしても今のは実に良かったでしょう、旦那」

「意味を持たない滅茶苦茶なものというのは、馬鹿にも利口にも、同じく神秘的に見えるものだ」

「旦那、それを云っちゃ困りませ」

男はそう云い、奇妙な口笛を吹きながら、着いたばかりの夜行列車に乗った。

〔編集者註〕本作では後にラーレンと改めた作中人物の呼称が旧形の「ラーレナ」のままになっているが、改めなかった。

捧ぐる言葉

ああかの瞬間より幾たびの鐘が鳴らされ

また幾つの陽が昇った事か

斑霧の彼方に見ゆる朧なる思索よ

そなたらの幾たび訪れし事か

今こそその瞬間は来たり

神聖なる瞬間の訪れし事を悟り

旋律今その声を潜め

真理は解き放たれぬ

青年よそなたこそは

幾多の先人の成し得ぬ偉業を

ただ一人の手にて成し遂げし者

今は冷たき檻の内に居れど

美しきものそこにありき

遥かなるものそこにありき

巍巍たるものそこにありき

静かなるものそこにありき

我等もまたそこに居ぬ

世も又そこにありき

渺茫たる真理の内にありて

それら全て纏綿たる闇の内に滅しぬ

第二部

あり得よう筈もなきそのころ
何時しか我が魂の内より沸き出でり
熱き塊胸に駆け上りて
我冷たき地に倒れ伏しぬ

高き塔に風は吹きつけぬ

高き塔に風は吹きつけぬ
青年遠き日を思い起こしぬ
遠き日の誓い
今ここにて果たさん

蒼穹に雲は流れぬ
風彼の頬に吹きつけぬ
白き雲又流れり

今は軽き彼の心映しつつも

青年長き日の思索認めし手帳を

思い起こしぬ

輝かしき時も今は去りて

この如き思いも又滅す事覚えつつも

高き塔に風は吹きつけぬ

青年遠き日を思い起こしぬ

遠き日の誓い

今ここにて果たさん

青年かつてこの塔を見れり

今も変わる事無くここにありき

彼も又ここにありて

変わりし景色に思いを馳せん

第二部

彼の心今は軽く

塔より下を覗き見ん

彼僅かに笑みを湛えつつ

静かに乗り越えん

高き塔に風は吹きつけぬ

青年遠き日を思い起こしぬ

遠き日の誓い

今ここにて果たさん

青年思い起こせり

彼その解を知りし時

彼一度滅しぬ

かの日々の記されし手帳残しつつも

輝かしきかの日々の終わりより

最早世の全てにこころなく

彼の眼の捉えうるは
在るように在るもののみ

高き塔に風は吹きつけぬ

青年遠き日を思い起こしぬ

遠き日の誓い

今ここにて果たさん

遠き日の誓い

今ここに果たされん

所詮こころ無きもの

所詮こころ無きこと

彼は眼を閉じぬ

幾多の憂いも今は遠く

恐れも又無き事

彼眼開きてその場を離れん

高き塔に風は吹きつけぬ

青年遠き日を思い起こしぬ

遠き日の誓い

今ここにて果たさん

静かなるこころ

解き放たれて躍れり

遠き日の誓い

今ここにて果たさん

月光（1、3）

1

彼の脳裏にある一つの疑惑が生ずる、一つの景色が生ずる——そこでは静かに“物”は在った。それは在る様に在り、互いに関わりを持たず、それは宛ら原始の風景のように思われた。

——原始なのであろうか。

彼は闇の中に居た。

家々の影も今はその闇の内に消え——最早——全ては闇の内に在った。

その時彼の上には、立ち込めるように全てを包んでいく漆黒の闇が降り注ぎ、目の前のものさえも、ただその闇に包まれ、漠然とした輪郭を除いて、既に見えなくなっていた。

闇が全てに降り注ぎ、今、その全てを消し去る——その内にただ一つの記憶を辿る事を願った彼の前に、漆黒の闇のみが、ただ一つの存在として残るばかりであった。

その時、彼は空を仰いだ。

雲に深く沈んでいた月が、その時再び、姿を現す。その時彼は、月明かりの中に居た。——雲は空の海に浮かぶ静かな紺青の波のようでもあった。

——その後は又、纏綿とした漆黒の闇に包まれていった。

彼はふと、旋律を耳にしたかのようにであった。深き闇の内より不意に現れ出でるかのように、かの旋律——彼は寝台の上に身体を起こした。彼の耳に響き、鳴るものがある。部屋の電話は鳴っていた。彼は寝台から降り、それを取った。

「菅谷ですが」

——渡邊が死んだ。

「市邨か」

——ああ、そうだ。

「俺はどうすればいい？」

——どうもしなくていい。ただ、知らせたのだ。

短い会話の後、相手は電話を切ったようだった。彼も又、手に持った受話器を戻した。ほんの数秒の間に交わされた短い会話の内に——渡邊朔郎の死という事実は集約された。

どのようにして死んだか。何処で？ 何故に？ 何時？

しかし渡邊は死んだのであった。それは事実なのである。しかしその事実に対して、果たしてどれ程の影響を与えうるだろうか。

しかし——渡邊の死が、もし何らかの間違いであったとすれば、どうなのか。だとすればそうに違いない。もしそれが何かの間違いであるならば、今でも渡邊は生きているのだ。

しかし、この知らせが間違いであったとして、だ。今この瞬間に、渡邊は矢張り死んだかもしれないのだ。無論、死んでいない可能性もある。——死んだ可能性も有る。

意味を持たない思考は一瞬の内に巡らされた。これは近頃の彼の習慣のようにもなっていた。可能性の検討——世界に対して、果たしてどれ程の影響を与えうるだろう。

彼は窓際に歩み寄り、カーテンを開けた。彼は光に眼を覆うた。

雲に深く沈んでいた月が、その時再び、姿を現した。菅谷公皓は月明かりの中に立った。

月は再び雲の内へ沈む。雲は空の海に浮かぶ静かな紺青の波のようでもあった。

——俺は裁かれた——いや、救われた。

母たちの姿が見える。俺の日常も、間も無く終わりを告げるのだ——

所詮こころなき事。

2

それは不可思議な夢に違いなかった。しかし或いはこの夢は、後に彼らの周囲に発生する数限り無い不可思議の先触れのようなものであったのかもしれない。

陽炎の立ち昇るアスファルトの坂は、勾配を増していく。

急な勾配と暑い日差しに、男の身体は既に水に浸ったように濡れ、流れる汗は、急な雨にあったようでもあった。坂の両側には、見た事の無い、青い茎の植物が、群生していた。

それらは皆、濃い緑色の花卉を持っている。花は、照りつける日差しに、半ば萎れていた。

そこで男は異常な事態に気が付いた。

坂の両側を埋め尽くす緑の花の花卉のみが、男の背後から一斉に、透き通るような青色に変わっていくのだ。

——何だ？これは。

直後、男の背後から、車のクラクションが聞こえた。

男は道をあける。

男の退いた車道の中央を、トラックは通り過ぎた。アスファルトの勾配を、上っていく。

しかし、見ると、そのトラックの運転席には、人の姿がなかった。

瞬間的に、陽炎の立ち昇るアスファルトの道路に、目を落とす。

すると、アスファルトの勾配に、およそ5m程の間隔で、ちょうど煙草の箱程の大きさの、三角形の突起が据え付けられているのが、目についた。

——そうか。ここから出る電波を、車体の下に取りつけられているセンサーが感知して、それによって無人運転ができるわけか。

そう思った時、緑の花弁が一斉に青に変わっていくその波が、自分の横を通り過ぎ、道を上っていくトラックを追うようにして、勾配を上っていった。

みるみる間にその波は、勾配を上っていくトラックを追い抜いていく。

そこでふと、先程波が行き過ぎていった、自分の横の平地に、目を落とす。

すると……坂の両側に群生している植物の花弁は、今男が来た道から、この勾配の向こうの丘まで、もう一つ残らず、淡い透き通るような、青に変わっていた。

——おかしな事も、あるものだ。

そう思いながら、また、急な勾配を、上り始める。アスファルトの勾配からは、相変わらず陽炎が立ち昇り、照りつける日差しに、頬から流れた汗の雫が、首筋をつたい、アスファルトの地面に、落ちる。先程と変化した事は、道の両側に群生する植物の花弁が、緑から青に変わったという、それだけの事だ。

それから色が変わらないところを見ると、先程の緑の色というのは、ほんの一次的なものだったのかもしれない。そんな思考を巡らせた。

——その時だった。白い煙のようなものが、勾配の向こうから、男に向かい、一気に押し寄せてきた。眼を閉じ、その場に立ち尽くす。暫くした後、男は眼を開き、辺りを見渡した。

すると、既にそこに、先程の煙はなかった。勾配の向こうから煙が押し寄せてきてから、ほんの十数秒というところだろうか。

そこで、ふと思いつき、空を眺めてみる。

見ると、日差しの照りつける、どこか濁った蒼穹の、ちょうど地面から100m程の高さに、小さな雲が浮いていた。

その時男は勾配の向こうに、赤と白に塗り分けられた煙突が見えている事に気が付いた。そこから、白い煙が吹き上げられ、こちらとは反対の方向に、それは流れていく。それが、その勾配を駆け下りたところで、突然空に舞い上がり、雲になった。

先程自分を包んでいた煙にしても、やはり同じように、雲になったのだろうか。

だとすると、あれは雲の工場かもしれない。

いや……もしかするとこの辺りの土地は、花卉が緑から青に変化する、このおかしな植物が大量に発生したために不作になり、あの雲は、植物を絶滅させるための化学薬品を降らせる、特殊な雨を降らせるためのものなのかもしれない。

と、道の両側を見ると、だ。いつの間にか、先程の植物の花弁は、淡い透き通るような青から、最初の濃い緑に、戻ってしまった。

——どうなっているんだ？

しかも、最初に青色だった植物の茎は、今は血のような、赤——緋色に染まっている。

その時、男は、見た。

その続いていく勾配の向こう——二色に塗り分けられた煙突から少し離れた場所に、異形の建造物が位置していたのだ。外壁はコンクリートのようにも見えたが、凝視するうち、それが日光を反射し、微かに金属的な光を帯びている事に気が付いた。

それは、平坦な大地に伏せるように、位置していた。そこから、複数の突起が、不規則に立ち並んでいる。その突起は筒状になっており、その先端が、斜めに切り取られていた。

——それが立ち並ぶもう1つの煙突であった事に気付いたのは、その直後であった。

男はそこで、立ち止まった。

この勾配を越えていけば、あの場所に辿り着くのだろうか。

——辿り着く事が出来るのであろうか。

3

その瞬間、男の忍び笑いは哄笑へと変わった。狂気の天才画家は、そこに居たのであった。

蠟燭の明りに照らされた仄暗い闇の奥——緋色の唇の躍動。どれ程の季節を——男はここに独り居たのである。その日々が男を狂わせたのであるうか。

或いは季節を狂わせたのもやはりこの男自身なのであるうか。

闇は痴呆の忘却をもたらした。

石造りの床に、無数の絵画が散っている。

館を囲む樹林は、燃え盛っている。テーブルに置かれた蠟燭の炎が、揺れる。

柱時計が時を刻む。——止まっているのであるうか。

彼は真に語り終えたのであろうか。残された真理の彷徨を見るようなのは気の所為であらうか。

贗神は、降臨していたのだ。

その真実はかようにして悟られた。

蠟燭の炎が、消える。床に散る絵が、飛び去る。

熱風と共に、無数の火の粉が黒ずんだ床に降り注ぐ。

黄土色のカーテン開き、大きく開け放たれた窓から、館に風が吹き込んだ。壁に低く並んだ書棚から、書物が崩れ落ちる。

男は立ち上がり、窓に歩み寄ると、それを閉めた。

その空間は再び、静寂の内に帰属する。

窓に目をやった。館の主人は、そこに立ち尽くしている。

——ここは、私の館だ。

男は壁に据え付けられた棚に歩み寄り、扉を開く。硝子瓶とグラスとを取り出す。——紫がかった液体が、グラスに注がれる。

グラスに注がれた透き通る紫が、窓の明りに照らされ、床に同色の影をつくった。男は瓶をテーブルに置くと、グラスを片手に、客人を見遣った。

客人は館を後にした。——高らかな哄笑が聞こえた。瓶の碎け散る音が、続いて聞こえた。

老人の囁れた声が、何かを呟いた。——

館の扉は閉ざされた。

(未完)

太古の瞑想

群青の空に浮く太古の明晰は消えゆき

赤熱の球形は遠く水平線に在る

原始の大气の内に終末の神秘の内に

最後の陽は昇りつつある

終末の荒廃が世界を覆い

太古の海は原始の波をたたえ

沈黙の寂寞の大气の内に

生命の影も今は無く

懐かしき人類の廃墟は冷たき岩となりて

原始の風の内を立てり

太古と終末との重なる境に

永劫の環は遂に合わさり

第二部

原始の海に太古の陽は昇り

孤独なる永遠は一人浜に立てり

相反するものら既にそこに無く

荒廃の波は又も白き砂に打ち寄せ

直線の永久は環の永劫へと向かい

最後の陽は太古の空に昇り

繰り返せる環の内に虚ろを垣間見る事試みても

微小なる消滅の前に永劫はなおも在り

循環の環は太古の空に繋がり

終末の荒廃は太古の陽に照らされ

永遠の孤独は故郷の岩の前に立てり

虚ろなる真理を思いつ

終末の陽は群青の山々に落ち

静かなる原始の海を闇が閉ざし

後記

◆
昂が逝って三年七ヶ月あまりが過ぎた二〇〇七年の四月初めの土曜日、私たち―昂の父と母―は、懐かしい人の訪問を受けた。二日前に昂の中学時代の陸上部の僚友であった小磯竜也君から会いたいという電話をもらっていたのである。高校三年生になっている小磯君。しかし、昂の葬儀以来、全く会っていない。葬儀の際に館林市内の他の中学校の陸上部の部員〇君、K君の二名と小磯君、そして昂の計四名が描かれたイラスト風の色紙を持ってきてくれて、私たち両親は、それを昂の棺の中に入れてやったことを鮮明に憶えている（もつとも、この色紙は棺とともに焼かれぬよう取っておくべきであったとか、せめてその写真を撮っておくべきであったとか、後で私たちは迂闊さを嘆くことになるが、しかし、あれは昂に贈られたものなのだから、良かったのだ、と思ったり、このことについては止めどなく想いがわき上がってくるのであるが）。今はないその色紙は、しかし、永遠に私たちの眼底に残っている。

電話をもらってから二日間、そわそわしっぱなしの私たちは、当日は朝から小磯君にはコーヒーを出せばいいかと話したり、ソファの位置を気にしたりしつづつ待っていたら、十時過ぎに玄関のチャイムが鳴った。小磯君は、お母さんといっしょだった。

◆
小磯君の来訪は、昂の肖像画を描くため、参考にする写真を借り出したい、というのが目的であった。彼は自分で編集した中学の陸上部の活動の映像を入れたディスクを持ってきてくれた。また、陸上部の競技の際によく昂が持参していたということで、バナナをたくさん頂いた。私たちは、まだ渡してなかった昂の著作選第1巻を渡した。

久々に会った小磯君は、三年半の歳月が彼を完全に青年と違っていい姿に変えていた。このときは私たちと彼のお母さんの会話がほとんどで、彼は借り出すための写真を探すため、昂のアルバムに見入り、まず口を開くことはない。わずかに聴けたのは、他の中学の陸上部と合同練習をした際、女子部員にねだられて、英語弁論大会のスピーチの再現をしてやったこと（昂はこの大会で優勝していた。演技力たっぷりなスピーチは他の中学の生徒の耳に入っていたのである）。そして、私が陸上の練習の合間に交わした会話の様子を聞くと、小磯君の答えは、練習そのものが「きつい」（彼の言葉そのまま）ので、間は休んでいたから、というものであった。かつて少年・青年時代があった私であるが、イメージネーション枯渇の中年おやじになっていたことにはととした。グラウンドの隅でたった二人の男子陸上部員は、休憩時は並んで腰を下ろし、黙って風に吹かれていたのだ。

小磯君のお母さんは、急に昂君の絵が描きたい、と言い出したんですよ、と事情を説明した。このときは、小磯君自身から即時訂正発言が飛び出した。「ずっと描きたいと思っていました」と。

小磯君が選んだ写真は、オーストラリアで昂が友人と写っているものその他、昂の幼年時代のものも含まれていた。イメージ喚起するためなのであるか。私は、このとき、小磯君に頼んだ。描き方は全く自由。ただし、出

来上がったたら、昂の著作選第3巻の巻頭に使用する事を許して欲しい、と。彼は快諾した。

◆ 小磯君とお母さんが帰ってから、私たちはディスクをパソコンに入れて、食い入るように画像を追った。小磯君は、BGMまで入れ、陸上部の出場した大会(ことに編集してあり、それはそのまま館林四中陸上部グラフィティであった。昂の懐かしい姿があり、そこで彼の身体が次第にたくましさを増していく様子も確認できた。順次、画像が流れ、二〇〇四年と表示された。昂はもはやいないはずである。出走前の小磯君が一人で立っている画像が現れた。いつも横にいていっしょに着替え、アップする僚友関野の姿がない。私たちは胸を衝かれた。一人、トラックを力走する小磯君に、心から済まないという気持ちが湧いてきた。陸上競技場に出るたび、彼は昂の不在を想起し続ける時間を過ごしていたのだ。

* * *

小磯竜也 様

記 後

今回は、西邑楽高校卒業制作展のご案内、ありがとうございました。2月3日の日曜日、両親で会場の文化むらに行って来ました。貴君には会えませんでした、そんなことは全く関係なく貴君と会って会話した

のと同じ時間を過ごすことができました。無論、事前に頂いた手紙で、制作の背景を語っていただいていたことが私たちの鑑賞に当たり、良き助けとなったのは間違いないと思います。しかし、それ以上に、芸術アートというものの持つ圧倒的な訴求力を感じたというのが本当のところですよ。

実は、私たちは、久々に昂に会えるという気持ちで、あいにくの雪でしたが、文化むらに向かったのです。

絵を見ました。昂の息づかいや、昂の自尊心や昂の銜いや、昂の悩みや昂の哀しみや昂の微笑みを持つ存在がそこにいました。そして、思ったのは、「昂が出てきた」という印象でした。どこから出てきたのか、彼の勉強部屋からか、私の記憶の中からののか、それとも彼岸の世界からかは分かりません。続いて絵の題名の「記憶」を見て、肺腑を掴まれるような思いがしました。竜也君が書いてくれた手紙の中にあつた言葉を想起しました。昂の表情、視線、イメージ、内面と、竜也君がずっと対話を続けていたことを知りました。画面の遙か背後から、次第に光が表れ、見る者の眼に映じてくるものがあることを感じました。

貴君の他の絵を見ました。改めて私たちが思ったのは、絵画制作というものが、見る、見つめる、観察する、という行為の積み重ねに他ならないのだな、という、実際に制作に当たる人たちにとっては当然のことを教えられた思いでした。しかも、単に見るのではなく、自画像であれば、それは自己との対話なのだということを感じました。幼いときの自分と現在の自分を重ねた画面、あるいは画中の人物の何気ない表情、総てに、対象と描く自己との無限の対話―往復運動を感じるものばかりです。

西邑楽の他の生徒の皆さんの作品も見せていただきました。つくづく、十代を生きていく、自分と格闘して生きていく、ということがどれほどのエネルギーを要する日々であったかを展示作品から学び取ることができました。

* * *

親だけがわかること。初めて絵を見たとき、昂は没時よりわずかに成長していた。小磯君の心の中で昂は一緒に青年への歩みが続けていたのだ。



著作選編集は、第一巻の後記にも書いたが、正直、心楽しい仕事ではない。懐かしさの後には対話が始まり、それはやがて凄まじい疲労感となって襲ってくる。編集者である以前に、昂の父である私がいる。当然のことである。どうにか作業を続けられたのは、高等学校に勤務している中で、私の状況を百も承知で会話に応じてくれる職場の仲間達がいたからである。

後記
太田東高校では、清水博先生のこととは忘れられない。私は教科は地歴科世界史を教え、清水先生は国語科であり、教科の共通性によるものではない。しかし、穏やかな風貌の清水先生は、その発言や発想のバランス感覚と人のあり様への洞察に優れ、その見方に惹かれる教職員は多く、私もその一人であった。また、清水先生は図書

紹介を兼ねた全校向けプリントを発行し、そこに盛り込まれた書物と同時に様々な視点からの発想のヒントは、職員間（保護者も含め）に多くの愛読者を持っていた。

編集に行き詰まったり、胸中にあるものが最早私の処理可能容量を上回ろうとすると、私は教育相談室にいる清水先生のところに行き、しばらく話してもらおうことがあった。そこでの会話を記すのがここでの目的ではない。しかし、本著作選には、昂の詩に関する清水先生の文章を掲載することをお話し願えたのは、本当に幸いである。二〇〇八年三月末、私は昂が小学五年の時に勤務が始まり、その最期を見送った時期にも勤めていた太田東高校の八年間の勤務を終え、転勤することとなった。最終日に会えなかった清水先生からは、私の机上に長らく貸したままになっていた河出文庫の『高橋和巴コレクション7 逸脱の論理』が返してあり、メモが挟んであった。別れのメッセージを頂いたのだ。私は、文末の「語る仲間がいなくなつて、少し淋しい」という文字からしばらく目が離せなかった。

◆ 遺稿集である本著作選を一年おきに出版したので、二〇〇五年の年初め以来、現代図書編集部の方々のお付き合いもすでに四年を超える。とはいえ、最初の出版形態を決めるための接触以来のお付き合いである須賀範子さんとは一面識もない。こういった一般書籍の形態で、きちんと発行することになったのも、須賀さんのご提案である。やりとりも、こちらが勝手に原稿を送ると、留守電に到着した旨連絡を入れておいて下さる、といったふうである。しかし、刊行に向け背中を押していただき、事務連絡の手紙の中で本当にさりげなく配慮の言葉を織り交せていただくことにどれだけ勇気づけられたか分からない。そして、提案いただいた中には、私たち昂

の父と母のあり様を心から思いやっていた上でのものがあつた。

版下製作では日下百合さんに毎回お世話になつた。欄外に小さく校正の際に書き入れていただく提案や指摘は、真摯に本作りをしていただいていることを痛感する瞬間である。このとき、昂と私だけだった空間に、もう一人の専門家が佇んでくれるのを感じる。一瞬、その閉鎖世界は二人から三人になるのである。



昂が逝つてから六年が経とうとしている。著作選としては、これが最終巻となる。ただし、昂の父と母である私たちにとり、これは単なる終了ではない。一つには、彼の小学校五年生以前の小説がまだ何編もあり、一種の「初期小説集成」としての構成も可能であり、また、哲学に集中して以来のメモがある。これは「哲学草稿集成」としての構成も可能である。あるいは、これらを活字として問うこともできるかもしれないのである。しかし、そういった形にならなくとも、彼との対話は無限に続くと感じている。それは、意識せずして行う対話であり、父と母が、声に出さずとも、互いに相手が昂と一日のうち何回となく行っていることを知っている対話である。言葉による表現に難しさを感じずるが、これでおわりではなく、常に未来は開かれているという思いを一人一人お名前を挙げきれない支えて下さった皆様に伝えて、とりあえずこの著作選の後記を攔筆する。

二〇〇九年八月

関野 豊 (関野 昂 父)

関野美絵 (関野 昂 母)

■著者紹介

関野 昂（せきの たかし）

1989(平成元)年8月8日群馬県に生まれる。
四歳のころより多くの物語を書き、小学校六年生からは哲学への強い関心を持つ。館林市立第五小学校から館林市立第四中学校に進み、中学一年生より生徒会本部書記、陸上部部長。中学二年生の夏、館林市中学生オーストラリア派遣団に参加。帰国後の2003(平成15)年8月24日夕刻、栃木県足利市内のJR線踏切に入り、自ら命を絶つ。享年十四歳。2005年8月『関野昂著作選1 関野昂哲学論集』、2007年8月『関野昂著作選2 機巧館殺人事件』刊行。

関野 昂 著作選 3 形式主義文学大全 ラーレン・ガダマー

2009年 8月 8日 第1刷発行

著 者 関野 昂
発行者 池上 淳
発行所 〒229-0013 神奈川県相模原市東大沼 2-21-4
株式会社 現代図書

TEL 042-765-6462 FAX 042-701-8612
URL <http://www.gendaitosho.co.jp/>
E-mail : info@gendaitosho.co.jp
振替口座 00200-4-5262 I S B N 978-4-86299-013-6

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan 2009



9784862990136

ISBN978-4-86299-013-6

C0090 ¥2190E



1920090021909



定価（本体価格2,190円＋税）